

文化三年、宗門帳よりみた桐生新町の人口・ 家族構成の検討と幕末の奉公人の実態

梅村佳代

Study of Kiryu-shinmachi Popular Composition, Family Structures, and Employees in 1806, with Religious Registrations
("Shumon-aratame-cho")

はじめに

- ① 桐生新町の人口と家族構成—文化三年
 - ② 宗門帳よりみた桐生新町の奉公人の実態
 - ③ 書上家文書からみた奉公人の生活実態
- おわりに

【論文要旨】

本論文は幕末期、文化三年の上野国山田郡桐生新町の人口と家族構成の実態及び桐生新町の店に雇傭されていた年季奉公人の人口数や雇用形態、生活状態などについて、文化三年の宗門帳をもとにして明らかにしたものである。

このテーマに関してとりあげた史料は群馬県桐生市立図書館に所蔵された多数の史料群のうち桐生新町の代表的な豪商人である書上家文書として纏められている史料を対象とした。書上家史料群のなかでは特に幕末の宗門帳が文化四年以後各年次ごとに欠落なく揃っており、人口や家族構成、奉公人などについて多くのことを知ることができる。

しかし本稿ではその宗門帳の最初の年次である文化三年のみ取り上げ、幕末の桐生新町の人口や家族構成、奉公人について実態の一部を明らかにした。

文化三年の上野国山田郡桐生新町の人口総数は二七二人であり、家数は五九四軒、

奉公人総数は六六五人である。宗派別では真言宗・浄土宗が多く、家族構成の特徴としては旦那・妻・俵・娘を基本とする直系単婚小家族が多数を占めている。店や商品の生産は奉公人を雇傭して、その労働力により営業されている。奉公人は一〇歳〜三〇歳の世代で最も働き盛りの年齢層であり、それぞれの家族経営体により雇傭されている。奉公人は年季契約による奉公人であるが、宗門帳から見た限り奉公人の出入りははげしく、契約後の定着のむつかしさがある。奉公人は少しでもいい条件のもとに動いていくであろうか。労働力の流動性が高いことが看取でき、毎年の宗門帳を丹念にたどると奉公人の労働力としての流れや動きを把握できようが、本稿では文化三年の把握に限定されている。